

〔学 会〕

東京女子医科大学学会 第230回例会抄録

日 時 昭和55年2月22日(金)午後1時30分より
場 所 東京女子医科大学本部講堂

1. 日本住血吸虫感染症の4剖検例

(第2病理) ○金井 孝夫・梶田 昭

私たちは、比較的短かい期間内に、日本住血吸虫感染症の4剖検例を経験したのでここに報告する。腸管、肝などの組織内に日本住血吸虫卵と思われる虫卵が認められたもので、長径約60 μ 、短径約40 μ 前後で楕円形のものが多く、卵殻はマッソン、H・E染色のほか、ギームザ、PAS、カルミン染色などで濃染する。

4例はいずれも都内あるいは近郊に居住する高齢の男性であった。流行地との関係については調査中である。各例の主な剖検診断は次のごとくである。

第1例(SN 7681, 75歳)胃癌、心筋梗塞、肺炎。第2例(SN 8168, 67歳)胆管癌、肺気腫。第3例(SN 8179, 80歳)重複(胃・舌)癌、心筋梗塞、肺水腫。第4例(SN 8204, 71歳)肝萎縮、脾腫、多因性肺病変。

このうち第1、第2例では、虫卵感染が偶発的な所見として見出されたもので、肝萎縮や脾腫を伴っていない。第3例は、肝に一種の硬変像が進展し(肝重量980g)、脾腫(290g)もおこっていたが、一方で重複癌や重篤な心肺病変が進展し、これらが致命的な要因になったものである。第4例は、食道静脈瘤破裂という門脈高血圧症状が前景に出て、通常の意味での肝硬変が疑われていたが、剖検によつて腸管、肝、肺におよぶ吸虫卵感染が証明され、これが病因の中心であったことが判明した。肝萎縮(620g)とともに脾腫(300g)も著明であった。

2. マウス精巢の培養における形態の変化

(第一解剖) ○飯島 治之・久保田くら

培養状態における精子形成の実験は、多くの研究者によつて行われ、種々の結果が報告されているが、まだ画一した結論がでるに至っていない。

したがって本研究においては、今回までに行われた研

究の成果を踏まえ、実験を行なつたものである。実験材料として、精子形成がある程度進んではいるが、精子形成期にいたらない未成熟のマウス精巢(17日齢)を用い、ホルモン投与群と、その対照群との2系統で、4、6、8日間培養し、その形態的变化を比較検討した。

その結果、すでに形成されている精祖細胞はそのまま進行して、第一精母細胞の厚糸期にまで達するが、それ以上の過程の進行は見られない。また、精祖細胞は分化はするが、その新生(増殖)は見られない。すでに第一次精母細胞にいたっているものも、同厚糸期で進行を停止する。培養8日目においても、精祖細胞はその分化の能力を失っていない。さらに、培養日数が増すごとに、セルトリ細胞にも形態的变化を示すものが現われる。これらの結果はホルモン投与群および、対照群の双方において見られる。

以上の結果から、今回の実験における培養環境では、第一次精母細胞の厚糸期以上に進んだステージに移行するために必要な条件および、精祖細胞が新生するために必要な条件が不足していたと考えられる。今後、これらの直接的原因を解明し、さらに他の精子形成時期にも検討を加えたい。

3. SLE 患者における suppressor cell の機能

(腎内科) ○西川 恵・湯村 和子・
早坂勇太郎・杉野 信博

SLE は、全身臓器を侵襲する自己免疫疾患で、特に腎症は、予後を左右する合併症として重要である。近年、SLE 患者において、抑制性T細胞機能低下があり、その原因として、血清中に抑制T性細胞に対する抗体が存在するといわれている。今回、われわれは SLE 患者における suppressor cell の機能を、同種リンパ球混合培養で測定し、また血清中のT細胞に対する cytotoxic substance について若干の知見を得たので報告する。